

## 明石の史跡（８９）人丸社の開帳



最近、田井功氏（明石市天文町）所蔵の文書を披見する機会を得て、調査したところ、「元和戊午四年明石町割扣帳」と題する史料があり、そのなかに、宝永8年（1711→4月25日正徳元）、正月18日より3月18日までの60日間、人丸社での開帳が実施されていた事実を知る。

「宝永」といえば、5代将軍綱吉政権の36年という長期治世の最末期にあたり、天災地変が続発した時期でもある。なかでも、宝永4年（1707）10月4日の大地震（M8.4で、わが国最大級の地震の一つ、震害は東海道・伊勢湾・紀伊半島で最もひどく、死者2万、潰家6万、流出家2万といわれる（『理科年表』709頁）は、当明石地方にも多大の被害をもたらした。三木郡大庄屋安福令茂（はるしげ）は、「明石表別而大破損」と記録している（『累年覚書集要』42頁）。人丸社も無傷ではすまなかったであろう。

松平直常（明石藩9代藩主）は、2年の歳月をかけて、社屋の修補に尽力。人丸社の再興をみたのが、宝永6年（1709）7月吉日であった（「棟札写」『兵庫県神社誌中』206頁）。明石城下から、丑寅（東北）の方角に存在する人丸社。

それが整備された姿は、まさに明石復興のシンボルマーク的存在であったろう。

ところが、翌7年夏は前年につづいての旱魃。三木郡では猪害に悩まされ、威し鉄砲の保持を新規に願いあげ、聞き届けられている（『累年覚書集要』56頁、おそらく明石郡でも同様な事態を推察する）。

あけて8年春からの人丸社の開帳が始まる。開扉された人麻呂の木像に、人々は、平穏な年を祈願したことであろう。しかし、冬11月には、姫路大地震があり（遠藤元男著『近世生活史年表』157頁）天災からの不安を、ぬぐいきれなかったのではなかろうか。

日本歴史学会会員 茨木 一成



人麿像